

今年の消夏

(波乱期の経営に打ち込む)

池田悦治

未曾有の不況下にあつて、経済界は、インフレ抑制のための物価安定を配慮しながら、専ら景気の浮揚を望んで、正に苦心の最中にある。

本春の賃金や、夏の一時金が、比較的平穩のうちに終結したのは、今後予想される安定低成長経済下の経営に対して、労使が真剣に対処合意したからであつて、これからの企業経営にとって大きな安心であつた。

しかし経営の舵取りが、世界経済の枠組みの中でしか御し得ない現代の企業にとって、また新たな難関が生れた。

最近になって世界の知識が訴えた地球資源の有限認識と自然破壊による生命の危機自覚から導かれる社会生活の体質転換が従来の経済の仕組みを変革してしまつたことである。

言うまでもなく、長年にわたつてわれわれが選択してきた自然科学万能の量経済の見直しと、人間性重点の省資源質経済の採択がこれである。

換言すれば、インフレ後遺症脱皮と人間性豊かな知識的少量経済の創造にいたるこんとんの過渡期経営をいかに秩序すべきかに精力を傾けねばならないのである。

翻つて、われわれは、長い間高度経済成長第一主義の下で、仕組まれたメカニズムの部分のように振まつてきた。そしていつの間にか人間の権威「思索する人生」を忘れていたように思う。行き過ぎた経済主義のひずみのおかげで、

再び人間 (human) に帰えることに気がついた。

人間が、自らの意思で、自らの時間の中で過去のしきたりや、他からの干渉を払つて、全く自由に行動する余裕をもつことを始めたのである。

いわゆるレジャーの時を得て、静かに自らを発見し、創造への思索を養う場として夏の余暇をつくり出した。

その夏が目前にきている。待ち構えた人間は、存分にこのときに憩い、考え、そして新たな自分を発見すればいい。

人間尊重時代の開花はここに見られる筈だ。とりわけ今日のように、激変こんとんの世相の中で未来を描くためには、心のゆとり「余暇」が必要だと思ふ。

けれども、産業界が置かれている現在の環境は余りにもきびしい、この産業界に新しい経営発展の路線を打ち立てることは、すべてを超えた緊急事である。曾つて賃金に見た労使の建設的な総意が再びこれに応えるだろう。

例年夏に余暇を親しみ、つねに新鮮な発想を自らに求めていたわたしたちも、本年はこれに執心せず、むしろ進んで波乱期の経営に徹し、敢えて人間性尊重時代に輝やく夏の余暇を轄愛することに消夏を得たい。

徹底による「ゆとり」もまた大切である。